
夜這う赤児

瓢六玉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

夜這う赤児

【Nコード】

N2416J

【作者名】

瓢六玉

【あらすじ】

これは親友に起こった実話です。

お盆休みに、親友の山下と飲んだ時のことだ。

彼のまだ十一ヶ月の長男がつかまり立ちやハイハイするようになったという微笑ましい話から一転して、彼の顔色が曇った。

「あのよ．．．。なんだかムスコがよ、最近、ぶきみでなあ．．．」

「エッ、なんで？」

「毎晩、十二時過ぎるとパツチリ目え開けてよ、
もそもそフトンから這い出すんだ」

「．．．んなの、どつてことねーじゃん。

赤んぼのときは、よくあるって。

ウチだつてあつたもん」

「そっかなあ．．．。

でもよ、ウチのは最近、毎晩だぜ」

「えーっ？ 二、三回じゃねーのか」

「そうなんだ。

だからよ、カミさんも気味悪がつて．．．。

医者に連れてこーか、って言うんだ」

「ほおお．．．。

なんだか、気持ちワリーな、たしかに．．．」

「だろツ．．．」

「．．．んでも、ハイハイしてどこまで行くの？」

「いやあ、ふとん抜け出ても、せいぜいフスマにぶち当たってそっ
から先には行けないんだけど．．．」

「ふーん．．．」

「あ、そうだ。

いっぺんだけ、フスマ蹴ったことあんだよ」

「ほんとかよー？」

私は赤ん坊が小ちな足でキックしてる様を思い浮かべると、思わず笑ってしまった。

「ほんとだって」

山下は笑ったが、嘘じゃなさそうだった。

「なんで、フスマ蹴ったんだろ？」

「知らねーよ、んなの・・・。」

おまえ心理屋だから、なんか知らねーの？」

「ま、乳幼児心理学っつーのはあるけども・・・。」

フスマ蹴っぽるヤヤコの話なんざ聞いたこともねーべさ」

山下はゲラゲラと笑った。

「んだね・・・」

話は、不気味なんだか、笑い話なんだか酔いも手伝って、段々ワカンナクなった。

「じゃよお、こーすべー」

「ん？ どーすんの？」

「今夜さぁ・・・、ヤヤコが這い出したらよ、おめえも寝てねーでさ、フスマをよ、いっぺん開けてみれッ」

「ああー。なるほいど・・・」

「そしたら、ヤヤコのやろ、どこさいぐのが、わがつぺした・・・」

酔いが回ってきたのか、ふたりとも段々と呂律がまわらなくなり地金がはがれて田舎ことばが出てきた。

「んだなすッ！」

山下は単純に感心したかのように酔いに濁らせた目を一瞬、キラリと光らせた。

「今晚、やってみっぺ・・・」

次の週の土曜。

私たちは、ホルモン焼きのうまい店で待ち合わせた。

「どしたい？ お坊っちゃん」

私は開口一番に尋ねた。

気のせいかな、山下はいくぶん緊張したような面持ちで言った。

「あのよお……。やったのよ」

「おう」

「そしたらよ、あいつ……」

「ハイハイ、ハイハイ、ふすま超えて行くんだわ」

「ふんッ」

「廊下あ、真っ暗なのに、平気でハイハイ行くのな……」

「ほお」

「で、行くとこまで行かせようと、もう手え出さねーで後ろにくっ付いていったんだ」

「ふんふん。ほんで？」

「そしたら、玄関の方に行くのな。」

真っ暗なんだぞ。玄関だつて……」

私は段々と面白くなつてきて、からだを前にのり出した。

山下は、目の前のビールを一口流し込んだ。

「そんでね……」

玄関のタタキにおつこちると大変だから、真っしろから、いつでも手え出せるように構えてたらよ……」

「はん」

「あいつ、何したと思う？」

「さあ……。なんだべ」

「いいから、当ててみれッ」

「んだよお……。クイズはいいからよ」

「ハハハ……。吠えたんだよ」

「えーッ?! ガオーってか?」 (笑)

「ちがわいッ!」

山下も噴き出し笑いをした。

「エテカーッ! ……つて」 (笑)

「なんじゃ、そりゃーッ!」

私は松田優作節でツツコンだ。

「な、笑うだろッ！」

なにもんやねん、おぬし・・・って、俺だってツツこんだもん」

（笑）

「なんなの？ そのエテコーって・・・。」

猿公のことかいな？」

「違うって。エテコーじゃなくて・・・」

エテカ、エテカー・・・つつうのよ」

「エテカあ・・・？」

ナスカの宇宙人の子か？ おまえんこの」

「違う、つつうの」（笑）

「ほんで、どーしたの？」

「なんだか、ぼっこれテープみたいに、エテカ、エテカ、ぼっかり言うもんだからワケわかんなくて、

『はいはい。』

もう、お寝んねちまちよーね」

って、ふとんに連れてったんだ」

「バツカだなあ。おめえ・・・」

「えっ、なんでよ？」

「その先、続きがあつたんじゃねーの？」

「なんの続きよ？」

「だからよお、ヤヤコがまだなんか言いたかったか、どっかへ行きたかったかの・・・」

山下は少し呆れたような顔をして言った。

「だって、お前、真夜中なんだよ。」

俺だって、会社あるもん・・・」

私は笑った。

「だよな・・・。俺みたいな暇人じゃねーもんな」

「んだでば・・・」

焼き上がったホルモンをコリコリ噛りながら山下がふと洩らした。

「そーいやよ・・・」

あいつ、玄関の先つつーか、外の方向いて、吠えてんだよ。目線がな・・・」

「ふーん。」

じゃ、外に出ていきたいんだべ、たぶん」

「んなこと、あるわけねーべ・・・」

「なんで？」

「んだって・・・」

そう言つと、山下は急に、ブルツと身震いした。

「なんだか、気持ちワリーッ」

「何が？」

「んだって・・・なんだかよお、玄関の外さ誰かいたら、どーすんだば・・・」

「はあー。なるほいど・・・。」

「そつかあ・・・」

「なにがよお・・・」

山下は独り合点している私の顔を怪訝そうにのぞいた。

「あのよお、お前、また、実験してみる気い、ねーかい？」

「ウチの子でか？」

「んだ」

「なにをーッ？」

私はその場で実験デザインを語って聞かせた。

「あのね。お前さ、会議用のボイス・レコーダー持ってんべ」

「ああ」

「それでさ、今夜もヤヤコ追跡して、録ってほしいのよ」

「吠えてつとこを？」

「んだんだ」

「どーすんだい？」

「心理学の研究に使うんだべさ」

「ちゃっかりしてからに・・・。」

ウチのセガレ実験に使う、ってか・・・」

「なんだ。（笑）」

今日は奢っからさ・・・」

山下は快諾とはいかないまでも乗りかかったナント力で、やってみると言った。

サンプリング・データの回収は、また土曜の晩だった。
例によって寿司屋で飲んでいた。

「ほら、これ・・・」

山下はレコーダーを通勤バッグから取り出した。

「どうだった？」

「んー・・・」

と言ったつきり、彼はコハダを一貫パクリとやった。

「ちゃんと入ってるけど・・・」

「なんだか、こんどは違うのよ・・・」

「なにが？」

「エテカじゃなかった。ゆんべのは・・・」

「でも吠えたんだろ？」

「おお。吠えた」

「なんて？」

「なんだか、よくわかんねーの。」

「だから、あとで、聞いてみれッ」

「ほーん。そりゃ、楽しみだない」

山下は寿司とビールを交互に口中に放りこんだ。

「荒木兄すこむ・・・」

「はーッ？ なに言ってるの？」

「いや、ゆんべのが・・・アラキアニスゴム・・・って

俺には聞こえたんだな、これが・・・」

「せがれのセリフか？」

「んだ」

「ほだにハッキリべしゃくつたのか？」

「いや……。なんとなく、そー聞こえるんだわさ。」

荒木のアンちゃんが凄んだ……。って、覚えやすいべえ」

「なーるほいど」

目の前のカウンターに私の好物の煮穴子がトンと置かれたので、すかさず手を伸ばした。

「ほいで、おめさ、玄関開けんかったの？ やっぱし……」

山下は、鼻でフンと笑うと

「なんだか、やっぱおつかねえんだわ……」

なんでだべ……」

「このやろ。臆病なんだべえ」

「ほだず……。おら、オクビョーだず。」

んだげんと、真夜中に、赤んぼのくせして、ほんとに誰か呼んでるみてーなんだもん。

目線がよお、ちよーど人の顔のあたりなんだず。

気持ちワリーぞ、おめえ……」

翌日、私は講義の合間に研究室のパソコンにさつそく録音データを取り込み音声解析ソフトを駆使して、あーでもない、こーでもない、と試行錯誤していた。

その時、ノックの音がした。

院生の奈保子が修論の下書きを持ってやってきた。

「先生。どうにか、やっとゆうべ書き上がりました」

「あ、そ……。ちよつと待っててね……」

と言ってマウスを何気なくクリックした。

すると、突然、パソコンから子どものような叫び声が出た。

「もうしないからッ！……」

「ウワァーッ！ なんですか？ 今の……」

奈保子がビクビクして言った。

私もドキンとした。

慌ててパラメーターを確認すると逆行発声の操作をしたらしい。
再度リターンすると

「もうしないから・・・」

という女の子の声がハッキリ聞き取れた。

私は奈保子にも確認した。

「そう言ってるよね・・・」

「はい。そう聞こえます・・・」。

けど、何なんですか？ これ・・・」

私はハッとして目の前のホワイトボードに

「M O U S I N A I K A R A」

と横文字で書いてみた。

奈保子がそれを声に出して読んだ。

「モウシナイカラ」

「じゃ、反対から読んでごらん」

「あらきあにすおむ」

「そう・・・」。

荒木兄凄む、じゃなかったんだ」

私はすかさず赤いマーカーで

「E T E K A」

と書いてみた。

そして背筋がゾツとした。

「エテカ・・・？」

なんです、これ？」

奈保子は不思議そうな顔をした。

「反対に読んでみな」

「あ・け・て・・・」

そう。

そうなんだ。

「あけて。あけて。」

あけて。あけて。

もうしないから・・・」

私は奈保子におかまいなしに、すぐに山下の会社に入れた。
「どしたの？」

のんびりしたその声とは正反対に私は高ぶった声で訊いた。

「お前んちってたしか借家だったよな」

「そうだよ」

私も彼も、職場では決して方言を使わなかった。

「あのさ、前に住んでた家族って知ってるのか？」

「ああ」

「どんな？」

「叔父さん夫婦だよ。今は、別のところに新築したから移ったけど・
・・」

「叔父さんちに子どもいたか？」

「ああ。いたよ三人」

「死んだ子っていたか？」

「死んだ子お・・・？ いねーよ。んなの・・・」

「そっかぁ・・・」

私は当てが外れてちよつとガツカリした。

私の突飛な空想はどうやら空振りに終わったようだった。

「あつ・・・」

あのな、そーいや叔父さんたちの前にも別な夫婦が住んでたんだよ・・・」

受話器の向こうで語る山下は私の推理小説まがいの空想なぞ想像もつかないはずであった。

「ほんでな・・・」

たしかまだ三才くらいの小っさい女の子がいたけど病気で死んだって。

いや・・・。

近所の噂では折檻っていうの？

酷かったらしいぞ。

今なら児童虐待か・・・。

なんでも、真冬でも裸足で玄関の外に閉め出されたりしたらしいぜ・・・。

あんがい、病死じゃなく凍死だったりしてな・・・

アハハ・・・」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2416j/>

夜這う赤児

2010年10月8日15時26分発行